アメリカにしばし留まるの記

玉村和彦

アメリカは大きな国である

英語についての自信はなかったが、アメリカの国についての自信はあった。ミシシッピーは大平原を貫流し、左にロッキー山脈、右に摩天楼をいだくニューヨークの都市をもったアメリカは、書物、写真、人づてに大変親しいものであった。僕の頭の中にあったアメリカは、大きな大きな国であった。

アメリカについたのちの第一印象は、現実のアメリカが、僕のそれまでのいかなる想像をも越えた大きな国であったことであった。大きさは僕を圧倒した。

時速一〇〇キロ以上でとばしていたグレイハウンドのバスは、ソートレーク市の手前で灰色の平原を突走り始めた。バスで二～三時間つづくこの平原が、塩の砂漠であると気がついた時はただ唖然とした（ソート・レークが文字通り鹹湖であることは知っていたが、まわりに塩の砂漠？があることを僕はうかつにも知らなかった）。さらにバスは、開拓民がフロンティア・ラインを西部へ西部へとおし進めていったその道を逆に辿っていった。いつもは車を運転できない老人と、車を買えない黒人で満ちている――このような事実はあとで知ったことであるが――その長距離バスに、その夜はほとんど乗客がいなかった。バスは闇の荒野をひたすらに走りつづけ、時々対抗車のヘッドライトが車内をぱっと照らしてうしろに消えていった。そんな時、私のうしろに坐っていた青年がギターを弾き出し、それにあわせてカンサス大学に行くという可愛い二人の女子学生が、カントリー・アンド・ウエスタンを歌いだした。僕はその歌に耳をかたむけながら、暗い車内でバス路線図をとりだして、このバスがシャイアンとかララミーとかいうような聞きなれた町に寄って行くことをたしかめた。アメリカの大きさ　それは、島国からでてきた僕の腹をいやというほど満たしてくれた。

留学先であるミシガン州立大学に着いてからも、馬鹿でかいアメリカは、しばらくは僕の主要な関心事であった。アメリカで最も広いといわれるこの大学には、六系統のバス路線がキャンパス内を網羅していた。キャンパスには、軽飛行機用の小さな滑走路もあったが、問題はその滑走路があるという事実を知らぬ学生がいたことであった。

キャンパスが広いためか、こんな悲しい話もある。南米のコロンビアから来た親友の日系人S君は、わざわざ日本まで行って探してきた花嫁さんが自慢であった。そのS君の訃報を聞いたのは、僕がミシガン州立大学での一年間の学生生活ののち、ノースウエスタン大学に移ってからであった。彼、奥さん、赤ちゃん、それに友人を含めた計四人が、なん

とキャンパス内での交通事故のために全滅していた。

ミシガン州立大学の寮の一部　（タイム1969年3月29日号より）

大学の財政

大学が大きなことは、広さばかりではなかった。強大さというおうか、あるいはそのものずばりに財政力とでもいおうか、ともかく、ミシガン州立大学の場合は、四万を越える学生の多くをキャンパスの寮（写真参照）に収容していた。大学院生であった私の寮の部屋は、ホテルのシングルなみに立派なものであった。またこの大学では、土・日曜を除く毎日、ステート・ニューズとよばれる学生による新聞が発刊されていたが、これには国内外のニュースが非常に手際よくまとめられており、ジョンソン大統領の娘さんに赤ちゃんのできたことを、どの商業紙よりも早くスクープする等という大規模なものであった。

決　算　書　　1965学年歴　単位：万ドル

収入		支出	
授業料等	1,886（33%）	研究教育活動	2,301（40%）
配当	737（13%）	政府研究	1,359（24%）
贈与	461（8%）	運営費	353（6%）
政府より	1,544（27%）	維持費	313（5%）
副次的活動	726（13%）	副次的活動	723（13%）
その他	367（6%）	学生補助	328（6%）
		その他	344（6%）
合計	5,721（100%）	合計	5,721（100%）

このように大学が活動できるのも、潤沢な財政に裏打ちされているからである。当然のこととしてアメリカの大学の予算に興味がわくが、ここにノースウエスタン大学の簡単な決算書があるのでみてみたいと思う。この大学は、中西部にある私立の名門校であって、学生数一万数千名の男女共学の総合大学である。

ここで多少説明を要しよう。アメリカの大学では、その資金をますます授業料に依存してきていることである。手元にある資料では、この大学の一九六六―六七年の予算において、五〇パーセントを授業料に依存している。ノースウエスタン大学は私学にもかかわらず、政府よりの補助が二七パーセントの多

額に上っているが、これは政府よりの委託研究、黒人学生の入学を条件とした補助金等であろうと考えられる。アメリカの大学が株式をたくさん所有していることはよく知られているが、この大学の場合も例外ではない。日本にも進出しているペプシ・コーラの経営は、この大学が完全に支配しているということを聞いたことがある。副次的な活動というのは、付属の研究所――たとえば僕が所属していたトランスポーティション・センター等――のための独立した予算のことである。ともかく、この総額五、七〇〇万ドルというのは、日本円で二〇〇億円に上るのであるから強大な資金力といわなければならない。

ニグロのこと

二年間のアメリカ留学中、ほとんどの日が部屋と教室との往復に明け暮れた。僕の知っているアメリカは、地図の上からいっても、また僕の交際していたアメリカ人の限られた数と階層からいっても、アメリカのほんの一部分であった。たとえば、家のまわりでいつも僕の車をみがかせてくれと言っていた少年を除いて、僕にはニグロの友人が一人もいなかった。僕にニグロの友人ができなかった理由は簡単であった。僕の知っている範囲では、ミシガン州立大学にも、またノースウエスタン大学にもニグロの大学院生がいなかったからである。アフリカからの留学生は数多く知っていたが、彼らはアメリカのニグロをたえず避けていたような気がした。アメリカのニグロの九五パーセント以上が混血児であるといわれているが、彼らの顔はアフリカからの留学生とは全くちがっていた。

暴動の直後のデトロイトにて（筆者写す）

僕がニグロ問題についてほんの少しだが知る機会を得たのは、友人に招かれてデトロイトに行った時のことである。それは一九六七年の非常に暑い夏の期間におこった暴動の直後であった。まだデトロイトにはところどころ煙がのぼっていて、完全武装をした州兵（ナショナル・ガーズ）が街のいたるところに立っていた。僕の友人は行く前に、ニグロは馬鹿だ、自分達の家に放火していると語っていたが、僕がそこに見たものは、焼け落ちた白人の所有している商店街であって、住宅と思われるものはほとんど焼けていなかった。正直なところ、僕がそのニグロ街で一番驚いたのは、立派な住宅であった。白人が郊外に逃げていったあとに住みついたのだから美しい住宅街であるのは当然かも知れない。ただ外から見ていたのでは、その家に何家族住んでいるのかはもちろんわからなかった。

友人の両親の家は、デトロイトの郊外、フォード一家の住むグロスポイントであった。この町には、ニグロ一人、ユダヤ人一人見ることはできないと彼は自慢していた。いや日系人も住んでいなかったようである。広い芝

生を持った瀟洒（しょうしゃ）な家の中には、ミノル・タカハシの設計した邸宅もあった。ニューヨークに今度できる一番高いビルの設計者である彼についてのデトロイト・フリー・プレスの新聞記事の中には、彼がデトロイトの郊外に土地を求めたが、日系人であったためにどうしても得ることができなかったと書かれていた。彼の探していた場所が、グロスポイントであったどうかは知らないが、その時鮮明にその記事を思いだした。

僕の友人は、自分の家についた気安さのためか、ニグロについてのいろんな話をしてくれた。先の少しとんがった僕の靴を指して、このような靴はニグロしかはかないと軽蔑のこもった言葉をなげたのを、なぜだか今だによくおぼえている。このように深く潜在する差別意識は、一朝一夕で解決できるものではないだろう。

三人の会話――エピローグにかえて

次は、アメリカ人のD君、ヨーロッパ人のF君、アジア人のT君の空想的会話である。

F君　アメリカに来て、ヨーロッパと比べて一番感じるのは、すべてのアメリカ人が一人ぼっちのように思えることだ。

T君　アメリカ人は授業中のわからないところなどは、親切に教えてくれる。だが映画や食事等にはなかなか誘ってくれないなあ。

D君　アメリカでは全てが常に競争なのだ。あまり他人のことをかまっておれないんだ。子供からみはなされた老後の生活はみじめだよ。

T君　よくいうように、競争が今日のアメリカをつくっただろう。だがこの考え方は、逆にすべてのものを効率だの点だけで評価しようとしている危険はないだろうか？　たとえばベトナム戦争反対者の意見にしても、戦争そのものを否定せずに、あれだけの投資をニグロ地域の改善に使ったらと説いている。

F君　僕は「マッカーシーを大統領に」のキャンペーンを手伝っていたが、それだけとはいえそうもない。学生の中にはヒューマニズムからの反対意見も少なくなかった。

D君　あのキャンペーンは、ほとんどが大学生の自発的なものであった。

T君　たしかに、アメリカのよいところは、正しいと思ったことを他人に憚ることなくすることだと思う。そこに行くとアジア人は自分の感情を押しかくそうとする。アメリカの学生が教室でわからないことがあるとすぐ質問するあの態度が、新しいすぐれた人材を養成していくんだろう。

F君　大学のシステムの話になると、ヨーロッパは一様に中世だ。封建的な大学の機構はヨーロッパのガンだ。

T君　そうすると君はシュレベールが、「アメリカの挑戦」の中でいっているように、もしアメリカの発展に世界でついていける国があるとすれば、それはスウェーデンと日本であるという見解を信じるかね。

F君　ヨーロッパについてはいえるね。アメリカはおそろしい国だ。アメリカのインノベーションを止めるものはなにもないであろう。

D君　だがアメリカでは、ニグロ問題の重圧は大きいよ。

T君　どの国も問題はある。人種差別を撤廃する一番の武器は、教育ではないだろうか。アメリカは今、莫大な金額をそれに投資している。大局的に見て、アメリカの発展を支える人々の流れは尽きないようだ。

（昭40商院卒・商学部・専任講師）

ニュージーランドを旅して

中村　遙

一

ニュージーランドは世界で最も社会保障の確立された国である。国の総予算の三四パーセントが社会保障の経費として使用されている。福祉国家スウェーデンも遠くおよばないといわれているのである。スウェーデンは北国であり、冬期はもちろんのこと寒気が強すぎるがニュージーランドは暑からず寒からずの国である。南島には一万フィートを越す高山が十七座もあるので年中山頂には白雪をいただいている山が幾つもある。

北欧ノルウェーやフィンランドのようなウィンタースポーツができる。この国の面積は日本の本州と四国ほどで、人口二七〇万人。その約七割が北島に住んでいる。北島は南島よりもやや平地が多く、従って牧場も多い。人口の約二十五倍の羊と二倍半の牛がいる。ニュージーランドは羊の国であり、また乳牛の国である。

この国では、自国で必要な食肉や乳製品の四倍以上をも生産しており食肉や酪農製品を輸出して、日用生活必需物資を買い込んでいる。国土面積に比較して人口が少ないことと、気候が温和なので植物がよく生育している。特に牧草が一年中青々としているのがこの国の特徴とでもいえよう。牧畜をする条件としてニュージーランドほど恵まれている国は、世界のどこにもないだろう。オーストリアもこの点、好条件に恵まれているが、スイスの牧場などとは気候の条件が段違いに恵まれている。もちろんわが国とは比較にならない。

またスイスの冬の寒さはひとしおである。アルプスおろしの北風は牧草を完全に枯らしてしまう。世界でニュージーランドほど、牛乳の価格の安い国は恐らくあるまい。四合ビンで配達して日本金十六円也である。原価なら四合が十円程度である。どこのホテルで牛乳を呑んでも、牛乳だけは泊り客なら無料というのがこの国の常識である。

日本金千円程度で泊れるＹＭＣＡのホステルであっても、朝飯にはやわらかい子羊の肉を骨付で嫌というほど、食べさせてくれる。もちろん英国式でホテル代の中に朝食は含まれている。オークランドでもウエリントンでも、町なかのホテルであっても一泊日本金二、四〇〇円程度でバス・トイレ付である。

この国の近くには土地を求めて食指を動かしてくる相手国がいない。国際競争の圏外にあって、多年にわたって悠々と平和を楽しんできたのがニュージーランドである。この国が世界の楽園であると思われるのは道理があ

るといえよう。自然美の豊かなこと、温泉もわくし、美しい山や湖水が全島のいたるところにある。北島のエグモンド山のごときはわが国の富士にそっくりの山であって、極めて美的である。広々とした麓野をバスで横断するのも頗る風情がある。

二

欧州でもスイスは国際的国家としての存在価値を発揮しているが、ニュージーランドは国際間に孤立した形で存在している。英国の属領として母国英国が欧洲の戦禍のさ中にあったときでも、平和を維持し、世界にうらやまれる楽園として悠々と生きながらえて今日にいたっている。

太陽の没する所を知らないといわれた大英帝国がキャプテン・クックをこの地に派遣して占領を確保したのは一七六九年で今からおよそ二〇〇年以前である。これより約二〇〇年以前にオランダの東インド会社が派遣したタスマン（Tasman）の発見したのが現在のタマスン島である。その後南島を発見したが、マオリ族の強力な妨害を受け占領を確保することができなかった。そのためキャプテン・クックの発見はこの島の再発見ではあるが、事実上はこの島の歴史はこの時より始まるといっても決して過言ではない。

ニュージーランドは今から約六〇〇年以前にマオリ族によって占領されていた。

マオリ族は決して蛮民ということはできない。彼らはハワイキ（Hawaik）から舟でこの島にきて当時の原住民を征服してここを占領した。その後英国の領有するところとなり、多くの移民がこの島に流入して開拓に従事した。この間先住民族のマオリと衝突し戦争はながく続いた。移民の数が多くなるほど、マオリの形勢は悪くなった。一八三九年キャプテン・ホブソンがこの島に副総督としてきて以後、マオリとの間にワイタンギ条約を結んで土地の占領を確保した。

（写真はオークランドにあるカリタネ乳児院）

先住民であるマオリ族は土地の占領に関して、英国よりの移民にその席を譲らざるを得なくなった。力の対決において敗北したのが先住民族マオリである。彼等は日本の先祖と同じであるとの説をなす者がある。民族学的な確証は成立していないが、その裏付になる資料がないでもない。

その後ホブソンが正式に総督に就任し近代的行政の基礎が確立した。

マオリ族は八十の議席のうち、四つを維持して今日にいたっている。人口は全島で二十一万と称されている。現在では自然繁殖率は白人を遙かに越えているが、欧洲よりの移民が多いこの国は数的には圧倒的に白色人種の国である。

政治的には世界で一番早く男女の平等が認められ、婦人参政権を与えた国である。もちろんマオリも同様である。マオリ族の多くは農村地域に住居して農耕に従事している。

自然美に恵まれたこの国には温泉も出るし、風光も明眉で特に海岸美に恵まれている。温泉の地熱を利用して発電している場所はエグモント山の近くである。主都ウエリントンの人口は二十万人程度であるが、海岸は特に美しい。

オークランドはこの国第一の人口を有する大都市である。この国第一の橋はわが国の石川島造船所が再建した。資材の大部分を日本から運んで四十人の技術員を満一カ年派遣して、日本の面目をかけて建設した。

三

ニュージーランドは前述したごとく国費のうち三四パーセントを社会保障に用いている。そのために一般所得税の他に一律に七、五パーセントの社会保障税が個人並びに法人所得に課せられている。高額所得者に対しては収入の約六五パーセントほどが税金として取られることになる。

社会保障を充実させようと思えば必然的に国民の協力が必要である。納税によっての協力と精神的協力である。国民は良く税負担に堪えることが求められている。

拠出金制度に基づく社会保障は相互の負担金の増額が必要である。目的税に基づく協力は納税による国家への協力である。そのためいずれかによる政府の資金プールがなくては給付金が出ない。スウェーデンは四パーセントの目的税で国民生活の底入れを強固にしている。ニュージーランドはスウェーデンの倍近くの社会保障税を一律に取上げて国民生活の底入れをしている。四パーセントと七、五パーセントの開きは極めて大きい。

ニュージーランドが社会保障において、世界第一であることには大いに理由がある。この国が公立学校は幼稚園から大学まで月謝無料である。税負担に基づいた教育資金のプールができているからである。

ニュージーランドで社会保障法が成立したのは一九三八年で、サーヴェージ首相時代である。彼がこの法律を制定する頃は母国英国における最も困難な時代である。社会保障制度の父的存在であるヘンリーベヴァリッヂが、彼のひきいる委員会を代表して報告書を提出した時代に先だつこと数年である。

しかし母国の困難を横目で見ながら悠々平和を楽しんだのではない。多額の戦争負担に堪え、また出兵もした。朝鮮戦争でも、ベトナム戦争でも、身分相応のおつき合いもしているのがこの国である。日本占領の駐留軍にもオーストラリアの兵隊もいたが、ニュージランドの兵隊もいた。時に日本人と結婚して

二人ずれで帰国した者もある。生活に困るということを知らないのがこの国である。生存競争が少ないので、義務教育を終えた人々の上級校への進学は十パーセントである。授業料を免除しても入学志願者が少ないのがこの国の実情である。

（カンタベリー大学）

幼稚園も同年令児の三〇パーセントが入園している。住居はわが国とはまるで比較にならない広々とした庭に囲まれている。グリーンの広場で青天井を見ながら小山羊の焼肉を食べるのが、この国である。日本では家庭とはいっても、その実、庭は殆んどない。

四

社会福祉の中には物心両面の福祉がある。その物的福祉を中心として考えられていたのが社会保障である。他面国民の納税を基礎にした国家財政による生活保障がある。これらの保障だけで人間の幸福が到来するとは思われない。精神的な安全保障が必要である。このことは人間がこの世に生をうけた最初の時から始まっている。公害からまもられること、交通地獄からまもられること、基本的人権が尊重される、等々のことが述べられよう。最も大切なことは人間の善意が尊重され、またまもられることである。

また不公平のない世の中が創造されることである。ニュージーランドの如く、風光に恵まれ、美しい海岸美が国土到る所に転開している国家であっても、もし人間の心の中に愛と平和が樹立されていなければ、福祉国家は建設されない。幸いにこの国は人情が素晴しく素朴な中に愛情にみたされている。

ニュージーランドは今では観光ズレをしていない国の一つである。街では見知らぬ人が〝グッドモーニング〟と挨拶をしてくれる。早朝からことばによる愛情の交換が始まる。人の心の美しさはこの国の人々の心を慰めてくれる。花壇を多く作って、町中を美化しているのも、心の美しさと、愛情の表現の一つといえようか。

宗教はキリスト教一色で週五日の労働日、土曜は休日、日曜は教会と決められている。一人当りの国民所得は一九六七年で一カ年、一四四二弗である。わが国の倍以上である。

道路の整備も良くできている。長距離バスでも日本程疲れない。日々の精神的安全保障を確保しているのが、ニュージーランドである。立地条件に恵まれていない日本で真似しても到底及ぶべくもないが、さりとて駄目なものばかりではない。日本も追いつこうと努力している国の一つといえよう。しかしそのうち特に必要なものは精神的福祉の開発である。

（昭5・大神卒・水上隣保館々長）

日本映画の可能性について

黒木和雄

5月28日（水）アッセンブリー・アワーにおける講演に加筆して頂いたものです。

なぜ映画を選んだか

久し振りに同志社に来たんですけれど、東京の大学と同じように立て看板がならび、スピーカーが、がなり立てているといった風景で、同志社にも、やはり良心に満てる若者たちがいるんだなと大変共感を覚えなつかしい母校の空気が新鮮に感じられたわけです。

日本映画の可能性などという大きなテーマを今日、語り得るかどうかは分かりませんが、映画の仕事を通じて、最近自分なりに考えていることをお話ししたい。

自分としてはなぜ映画を選んだのか。私は同志社の政治学科にいたわけですが、卒業にさいして、例によって就職がなくて路頭に迷ったわけです。その中で考えたことは、学生時代には一つの理念みたいなものがあって、その中で燃焼していたんですけれど、実社会に放り出されて見ると、その理念と現実の差が非常に大きくて、これはまあ誰でもがいうことですが、やはり矛盾が非常に大きくて、自分がどうしていいか、何をしたらいいのか、どういう職業を選んだらいいか、全く考えこんでしまったわけです。それに、ぼくは生来人の前で話したり、お説教したりすることができない質で、つまりどもりだったのですが、自分のそういう消極的な性格をどうしたらいいか、どもりの性格をどうしたらいいのか、悶々として、しばらく京都でぶらぶらしていたことがあります。そうしている中で、自分を対象化することによって、何らかの形で社会に参加をすることができないだろうかということを考えていたわけです。

自分がもっとも興味を持っているものはなんだろうか。そのとき思いついたのが、小学校の時から学校をさぼってでもよく見たのが活動写真だったわけですね。それで、映画を選ぶことによって、つまり映画をつくることによって、自分を、あるいは自分の考えていることを対象化していくことができるのではないかと思いまして記録映画の世界に入ったわけです。

当時は五社の全盛時代でありまして、撮影所の中にはなかな

か入れない。しかも身近な形でいろいろの制約があってぼくなどには何年かかっても撮れそうもないような気がしたものですから、そういう職人的な世界ではなく、もっと身近な世界を直接的に短期間で撮っていくことが可能な場所はないだろうか。それが記録映画だったわけです。それで私は記録映画から映画の世界に入りました。

自己を対象化して行くことが自己を解放して行く、あるいは自由を獲得して行く行為であるなら、自分にとって映画とは、人間の解放や表現の解放をめざして行くものでなくてはならないと思って今日までやって来たのですが、当時、ご承知のように五社の路線が非常に強固な形で製作、興行、配給を支配しておりまして、ドキュメンタリーといえども全くその配給路線の中にあり、記録映画を作っても多くの観客の目にふれないということが多かったのです。急速にしかも広範に独占資本の復活がおこって来て、企業的な映画、企業の宣伝をする映画がドキュメンタリーの中に登場し、そうしたPR映画の氾濫によって、ますます自己を対象化とするようなことが不可能になって行くし、自己の表現を解放していく方向も圧殺されていくという中で、ぼくとしてはそこを飛びだして、自分の好きな映画をどうしても作るしかないと思いはじめました。そうして飛び出して作った映画が「とべない沈黙」という映画でした。しかしこれも、アートシアターで一年〝おくら〟で、一ケ月間封切られただけで、今もって東宝の倉庫に眠っていて多くの人に見ていただけない。そんなわけで、それ以後四年間全然映画がつくれませんでした。

キューバとの出会い

ところが去年の一月にキューバの文化会議にでた人が帰ってきて、とにかくぼくに至急会いたいということなんです。会いましたところ、「とべない沈黙」がぼくの知らない間に東宝を通じて、海外に売れていて、キューバの人々が見て、映画人が非常に評価してくれ、合作の話しがちょうどおこっていたわけです。というのは、日本映画が八十本ぐらいキューバに入っていまして、日本の映画のレベルに対する一つの評価があり、日本の監督に演出させてとにかく合作映画をつくろうという企画があり、「とべない沈黙」の私が指名されたわけです。ぼくとしては五年前に作りました「とべない沈黙」がキューバという全然私の知らない、むろんゲバラとかカストロという名前は知っていましたし、キューバがカリブ海のどこかにあるという程度は知っていましたけれど、全く地球の裏側から私に突然合作映画の監督の指名がきたということで非常にびっくりしました。

しかしびっくりすると同時に、自分がぶっつかっている政治の問題、つまりさきほどの自分を対象化していく行為として映画を選んだこと、それから表現の解放といいますか、それは人間の解放ということにつながっていくこと、少し抽象的な言い方かも知れませんが、そのこととキューバがある意味で結びつき、その中で合作映画を作るということになると、自分がその政治的状況をはっきり直視することを避けて通れないという

ふうに思いました。つまりキューバで合作映画を撮るということは自分にとっての、また自分の考えている政治というものを、どういうふうに対象化するか、表現するかを避けては通れないだろうと同時に、自分がともすると政治主義的な形で、人間の解放を図式的につかんでしまうという危険性に常にさらされるだろうという危惧を持ったわけです。しかし、とにかくキューバに行って、キューバを舞台にして映画を作れるか試して見たかった。ぼくはだいたいドキュメンタリーの仕事の関係で世界をまわっていますけれど、外国はあまり好きじゃないし、あくまで日本にいて、日本人を描きたいし、日本語で、つまり自分の知っている言葉じゃないと人間を充分に描けないと常日頃思っておりますし、スペイン語の世界であるキューバではたして映画が作れるかどうか、作れてもドキュメンタリーにした方がいいのじゃないかと思っておりました。しかしとにかく友人達の激励もあり、旅費をかき集めて、単身去年の五月キューバに飛びました。

キューバの実情

そこでまず驚いたことは、いかにキューバがアメリカに近いかということです。飛行機で飛んでハバナの空港に下りて来ますと、沖の方にフロリダ、マイアミが見えるわけですね。つまり全く視野の範囲にアメリカとキューバという小さな島がある。それは日本と沖縄の比じゃない。完全にアメリカのひざ下といっていいところに社会主義国キューバが存在していたわけです。そこで私はイカッイクというキューバの映画局の若い監督やシナリオライターといった人々といっしょにキューバ中をまわったのですが、そうするなかで、ぼくがキューバで映画をとろうと思ったことは、キューバの革命がぼくの想像を越えた革命であったというか、学生時代に考えていた一つの革命というものに非常に近かった。ということは、基本的に人間の解放というようなものを政治の中心に置いている。その点に興味を感じたのです。実際そのことは、キューバの映画をいろいろ見たり、映画人とつきあうなかで見たのですけれど、全く検閲がない、しかも自由に映画が作られている、そこに政治主義的なプロパガンダ的なものがなくて、人間自体を見つめ続けて人間性を追求している形の映画が非常に多かったわけです。

たとえばアリアという監督が作った「低開発の記憶」という長編の劇映画があります。その主人公は革命前のブルジョアの青年で、大きなマンションなどを持っていたのですが、革命によって政府に没収される、しかしそのかわり年金が支給されるため、労働しなくても食っていける。それはまあ革命の一種の過渡的なブルジョアに対する政策がそこに現われているわけです。ところで、彼の妻も親も友人もマイアミに逃げているのですが、彼一人が何となく残る。何故残るかというと、キューバが彼のふるさとであるというようなことで残る。で、毎日ハバナの町に出かけては女と遊んでいるというような生活を送っている。ところがある女と結婚するというようなことで騙まし、そのあげく棄ててしまう。そこで、その娘の両親が怒って裁判

所に告訴する。ところでその裁判が行なわれる過程で、男の回想シーンを入れて、かつてのブルジョア的生活からくるブルジョア的意識形成のようなものの過去と現在が交錯して、一見アランレネふうのコンストラクションでドラマが進行して行く。そして裁判では結局無罪になるわけです。それはどういうことかというと、キューバはカトリックの影響が強いところで、処女が非常に尊ばれるということがあるんです。ですから逆にいうと、一旦、処女でないことが証明されると、結婚の約束をして棄てられるようなことがあっても、女の方が悪いんだというふうな感じがあるのです。従ってそういう理由によって無罪になって彼は裁判所をでていくわけですけれど、その時に、俺が無罪になるようなことはおかしい、自分としては、完全に女を騙まして棄てたんだ、それなのに、キューバの革命的法廷は自分を無罪にした。やっぱり革命なんてインチキだ。自分自身としては悪いと思っているのに、そこまで追求できない、何という教養のない低次元の革命であろうか、というようなことをモノローグで語るわけですね。

そういう形で彼が裁判所から歩いて来るとキューバ革命について討論会をやっている。しかし話している人々は全く観念的な、図式的な言葉を交錯させてやっている。それを彼が非常にシニカルに見て通り過ぎる。しかしキューバの革命の低開発性に嫌悪感を持ちながらも、キューバという土地と、キューバが急速に変わって行く現実が主人公を無意識に変質させて行く過程が執拗に追求されて行く。ラストは例のミサイルのキューバ危機にさいして、キューバの軍隊がハバナの守りにつくところを背景にして、それをぼんやり見ている男の横顔で、二時間近くの映画が終わります。

そこには何の結論も出していないしなんのテーマ、主義もない。かつてのブルジョアだった青年を執拗に追いかけて行く、そういう表現が許されている。ぼくの認識不足というか、キューバはほとんど映画なんか作っていないと考えていたのですが、そういうすぐれた人間の意識の世界をあつかった、しかもぼくなんかに非常に興味のある、ブルジョア的な意識、あるいはプチブル的な意識を対象化し、映像化している。そういうような水準に達しているキューバ映画とその方向を見まして、若い作家達を育てているキューバ映画の自由さと、しかもキューバの置かれている困難さとを同時に感じたわけです。

困難さというのは、完全に経済封鎖が行なわれていまして、つまりソ連の援助なしには一日たりとも存在して行けない経済的な現実的な状況がある。たとえばコーヒーもタバコも満足に飲めない、吸えない。それを生産している国でありながら。洋服も年に一回ぐらいしか配給されない。それはちょうど私の子供時代の戦争中の耐乏生活を思わせるような状態なのです。だからかつての一部のプチブル的な生活をした人、ブルジョア的な生活をした人達の中には相当の不平分子がいるのですが、その経済的な耐乏の中で、カストロ以下指導層の考えていることは、物質的刺激よりも、精神的な刺激によって、欠乏をこえていくというか、ある意味では精神主義的な、かつての、まあす

ぐ連想してしまうのですが、八紘一宇的な滅私奉公的なふんいきがあるわけです。しかしそれは、かつての自分が教えられてきた軍国主義的なものと違って、逆に国家を廃絶していくというか、国家をなくすることによって自分達は最終的に自由を得るんだ、物質的な刺激をも獲得しうるんだということですね。ゲバラの死に象徴されているように、これはキューバ革命の特質なんですけれど、国家を廃絶して行く、世界中の国家をなくすことがないかぎり革命は終わらないという独得の考え方に立っている。そういうことも、ぼくの表現の解放、あるいは人間の解放の問題と深くかかわっていくことの予感がありました。

「キューバの恋人」の製作

それで、五月にキューバから帰りまして、友人達と資金集めをやり、七月からクランクインしました。皆さんごらんになった方には蛇足になりますけれど、ぼくが「キューバの恋人」の中で描きたいと思ったことは、確実にショックを受けたことがあるわけですけれど、さっきも申しましたように、国家を廃絶して行くことがキューバの青年達の一つの大きな理想になっていて、そのことが彼らの現在の耐乏生活をささえている。つまり身近でいえば、スペイン語の世界、中南米がほとんどそうですが、共通する言語圏をまず一つの統合圏としたいという、これはゲバラの行動に象徴されているように、キューバの青年達もほとんど同じ考えを持っている、例えばそれは北ベトナムとか北朝鮮との政治的な、精神的な一つの連帯の基礎ともなっているのです。キューバ自体が一つのゲリラ的な根拠地になっていて、キューバ革命は世界革命が終わらないかぎり終わることがないという考え方から、彼らは本当に武器を持って非公式なんですけれど、ゲリラ的な訓練をして、どんどんラテンアメリカに旅立って行くわけですね。

実際に私の泊まっておりましたホテルのタバコ売場の一人の少女が忽然としてある日姿を消したわけですけれど、彼女も結局ラテンアメリカのガテマラかボリビアかわかりませんけれどもゲリラに旅立ってしまった。それは親戚も誰も知らない。おそらく彼女は永久に帰って来ないと思うんです。これもかつての特攻隊を思わせるのですが、しかし思想的な次元が違うのですね。そこで彼らは、キューバの革命を守ることから、キューバの周囲、つまりラテンアメリカの革命を推進させるという形でキューバを旅立って行くのです。自分の人生をキューバの中では全く棄てて行く、ぼくにはやはり、そんな青年達や女性達を実際に見たことがショックだったわけです。そこで彼女、そういう無名の一人の少女を中心に置いて、自分とあいかかわらせてみようということが「キューバの恋人」のテーマとなってふくらんでいった。そしてだんだんそれはドキュメンタリーであるよりもフィクションでいきたい、キューバの現実に即したアクチュアリティーのあるものにしたいというように考えました。四ケ月間キューバにいてから帰ってまいりまして、今年の一月からいろいろな所で試写会をやったのですが、私の意図したキューバとの出合い、政治や人間像との出合いが果してどこ

まで充分に表現されて観客の諸君に伝わっているか、見ていただかないと分からないのですが、ただ自分が今撮り終わって、追いつめられているような気持になっているのは、キューバを舞台にしてそういう人間像を描くことによって自分と政治とのかかわりあいを探求したのですが、半年近くのキューバでの生活から日本に帰って来て、何か放りだされたような感じがするのですね。うまくいえませんけれど、日本の現実の中で、もう一度自分を見つめてみたいというか、自己を対象化した映画を作らないかぎり、どうしようもなく「キューバの恋人」という作品が自分を追いつめてくるのです。「キューバの恋人」のラストはさっき申しましたようなゲリラに旅立った少女にふられた主人公が、ぼんやりとして画面の手前に向って歩いてくるところで映画が終わるわけですけれど、その姿がそのまま、自分がどこに歩いて行くのか、自分が日本の中でどういう方向に歩いていけばいいのかという問になって、作品自体から私自身が追いつめられているというのが私の現実でもあるのです。

日本映画の可能性

とりとめのない話しになりましたが、日本映画の中で私達仲間のめざしている方向は、表現の解放ということなんですが、しかしそれがどういう形で獲得されなくてはならないかというと、やはり自分達の手で、自分達の作りたい映画を自由に作るという体制を一日も早く作りたいわけです。しかし現実にはそれが政治的にも経済的にもがんじがらめになっておりまして、なかなか作れない。ぼく自身もこの「キューバの恋人」の上映の問題で東奔西走しているのですが、結局今の現状では莫大な製作費をかかえてそれを回収するためにはやはり次回作を最低の製作費で作ることによってしか回収する以外にないという、そのままでは悪循環になってしまうのです。自分達の手で上映していく、その上映の仕方をもっと観客との批評的関係で組織化して行く、あるいは観客との批評的な関係をつくっていく、そういう運動がないかぎり、自分達の映画を作っても作ることによって経済的にばたばた倒れて行く。映画というものは、どうしても経済的に回収しないかぎりもう足腰立たないくらい作れなくなることもあります。

これも実際、私が今回やりながらわかってきたことなんですけれど、つまり作る時点から観客層を測定し、組織化し、経済的回収の率を決めてかからなければならない。その範囲をみこして作ることが非常に大事なわけです。そのことのためには大島渚氏なんかとも話しているのですが、一つの配給センターを作って、自分達の映画を上映してくれる小屋をはっきりはじめから契約して行く、全国で何十館か契約して、その中で自分達のバラエティーある作品をどんどんながして行く、しかもその映画館を中心にして、ぼくらの映画を見てくれる観客との批評的関係、それは動員とか前売券とかの問題と具体的にかかわってきますが、そういう関係を確立していくことも一つの方法です。いずれにしても一本主義といいますか、一本作ることによってだめになっていくのではだめだ。しかもその一本も経済的

なことだけが先行していくというか、内容を観客に追従していくというか、そういう形が生まれてくるとその孤立感からくる観念主義、あるいは俗流的な政治主義にこりかたまった映画になってしまう。そこに柔軟な新しい発見、多様な人間像の発見というような自由な表現、いいかえるなら、実験的な表現をも含めて、作家の可能性を試していくような作品が経済的に裏うちされてつくられるという条件がそういうことでどんどんなくなっていくと思うのです。

現段階では、思想的な状況が映画界にもそのままもちこまれておりまして、お互いが足をひっぱっているような、悪しき状況も、うずをまいておりますけれど、何人かの作家達、今から作家になっていこうとする助監督諸君、カメラマン諸君がじょじょに、そういう方向の新しい日本映画作り、あるいは研究会を最近ぼつぼつ持ちつつあるわけです。そういう方向でしかぼくらの具体的な作品作りのイメージや展望がなくなってきています。

私の話しているのは「祇園祭」とか「黒部の太陽」とか「神々の深き欲望」とか、いわゆるマスコミを通じて皆さんご存じの独立プロ映画だけじゃなくて、もっと無名の、すぐれた才能をもった作家達が、まったく日のあたらない場所で、黙々と頑張っているということです。「三里塚」の小川紳介氏や「沖縄列島」の東陽一氏もそのようなグループの一人でありました。そういう才能に発表する機会を与えたいし、その発表の機会を獲得するためには、さきほど申しましたような製作条件あるいは配給条件、上映条件を運動的に作っていかなくてはならない。それは私達だけでできるものではなく、観客諸君やシネクラブなど多くの人達が参加することによって新しい才能の可能性を発掘し育てていってほしいと思うのです。日本映画の新しい可能性はやはりそういう方向からしかでてこないと、「キューバの恋人」の製作、上映を通じて私自身ますます実感しているわけです。

（昭二九大政卒・映画監督）

放送劇――日本海について

中島千恵子

日本海――

現実は、そこにも陽光がさんさんとして降りそそいでいる。特に、夏は、表日本と同じ明るさを持っている。

だというのに、何故、私たちは、日本海に対して暗さを感じるのだろうか、何故、裏日本という断絶めいたイメージがつきまとうのであろうか。

私は、昨年度NHKの懸賞放送劇を書くに当って、能登半島の灯台のある断崖に立ってみた。

名も知らぬ海鳥がしきりに舞っていた。

足元に、海の雄叫(おたけ)びが伝ってくる。

風の中に、切迫した厳しさがあった。

そして、私は、少しずつ、暗さのようなもの、威圧のようなものを感じ始めていた。

人々は、無雑作に、日本海の見透しは、地理的にも、産業的にも、さらに人間の生きて行ける環境としても、絶望的であるといい切る。

そのことも、現地にしばらくいて、わかるような気もした。

世界中に、この海ほど、逞(たくま)しい生命力を持って、その沿岸の土地を喰べ荒して行く海があるだろうか。

沿岸の府県、それぞれでは、工業力を持って、この地帯が〝裏日本〟と呼ばれる概念を、明るい〝日本海地方〟に変えようと、努力している、それが、ある程度の成功を納めつつあると聞いている。

だが、そうした大きい工業力もなく、一つかみの部落、一かたまりの漁村、それらが、今日なお、この力の海と戦っている。

湿気の多い冷たい季節風、霏々(ひひ)として降る雪、打ち寄せる荒波、地震、地すべり、これら自然の猛威が裏日本の侵食を進めている、その中で、私は、原始的な、人間の努力が、日本海の持つ暗さと、威圧の中に続けられている姿を、ある種の感動を覚えて祈るような気持で、作品と取りくんだのである。

それは、それらの貧しくひ弱い努力が、日

本海の夜明けを信じるかのように、私には受け取れたからである。

私は、日本海を主役にして書いた。

成功率の低いと思われた私の野望が、幸い入選し、今春、放送された。

その放送を聞かれたのであろう、同志社の方から、この原稿を依頼されたのである。共感を持たれたというのはやはり日本海が、今日的に再認識されたと思っていいのだろうか。

さて——

日本海がどうしてできたか、

日本海の海底資源の開発からも、水産資源の保護からも、いや、私たちの生活からも、大きな関心事である。

これまで、日本海は、大陸の一部と考えられてきた。地下の深いところに、マントルという高温の物質の流動の結果、しだいに沈降しはじめ、現在の日本海ができたと考えられていた。

ところが、最近、次々と新しい学説が生まれた。

その一つは、日本海は、もともと太平洋の一部で、それが造山活動で、日本列島が海上にもり上ったために分断された、つまり、日本海の海底も、太平洋の海底も、同じ玄武岩でできているという、ソ連のウジンチェフ博士の学説である。

次いで、同じソ連の地質学者ベルーウーソフ博士で、日本列島は、もともと大陸の一部だったが、地下のマントルから局部的に上昇してきた塩基性の物質の作用で、大陸の地質がぼろぼろにこわされた。その後、壊われた岩石のうち、軽い物質は流れ去り、重い玄武岩だけが残り、その部分が、日本海の深い部分となったという説である。この説は、ソ連のカスピ海や黒海の成因研究を日本にあてはめたものである。

これに対して、科学博物館の村内氏は、地中深いところのマントルの流動で、大陸の一部がちぎれて日本列島となり、ちぎれた場所が深い海底となって、地中深いところの玄武岩が露出したというのである。紅海の成因も、アラビア半島の移動によるものらしいことが、あきらかになっていることも引用して、移動説を主張している。

以上の三説からさらにすすんで、未来博士は、日本列島が、大陸から離れたのは、日本海にあたる部分が風化してなくなったためだと発表している。つまり、いまの日本海にあたる部分は、昔は非常に高い山であり、この山は、地下のマントルの対流で押し上げられてつくられたが、長い間に風化し、地下深いところにある玄武岩が露出するぐらいにまでけずられた。そのころ、このあたりに沈降が起こ

って、深い海底となったと述べている。この説は、日本列島で、はげしく起こった造山活動も、うまく説明でき、さらにベーリング海、オホーツク海の成因についても、合理的に説明できるので有力視されている。

事実、裏日本一帯のマントルの動きは、局部的な現象ではない。

一粒の砂、一掴みの土、それが一分一秒の休みもなく、日本海の谷間へ、こぼれ去って行く、見えない、そして音もしない、気がつくと、海が地面を食べて、形を変えてしまっている。まさしく海蝕である。

恐ろしいことだが、事実である。

このことが日本海の運命を暗くしている。

この現象が、少しずつ、少しずつ、不漁という形で現われ、日本海側の漁村を絶望的な方向にむけている。

南へ移動する日本列島——

その前途にあるものは、幾千米の深さを持つ日本海溝である。

光の届かない海底に待ち構えるキャニオン的断層。

それに向かって、一歩、一歩近かづきつつある日本列島の東北部——

ここまで到達して、私は、どきんとする。

そして、それ以上は考えまいと、私自身で激しく拒否するのである。

たとえ、いっときの豊漁にせよ、

いっときの潤(うるお)いにせよ、

それが、すぐ不漁に後戻りしてしまうにせよ、

私は、なお、日本海に希望を持ちたい。

朝は、深い靄の中に、ソ連からの木材定期船の霧笛が響き、夜は、岬や孤島の灯台が、光の円形を描き続ける。

そして、山の神、海の神を信じた古老が、一人、断涯に立って、ひそかな祈りを呟き続ける。

そこに、人がおり、人が生きている。

そして光を求めている。

霧笛は、太く長く尾を曳き、やがて、闇と、朝靄の中に溶解して行く。

靄は容赦なく、視界を遮り、あらゆる音も飲み込んでしまう。

だが、ある時は、嘘のように流れて、ソ連大陸の向うに、去って行く。

磯という磯、断涯という断涯には、波頭がアタックして来、白く、豪快な飛沫(しぶき)となって散る。

孤(ひと)り抵抗を見せる岩層も、たえまない地揺(ぢゆる)ぎを続け、呻吟(しんぎん)する。

高所恐怖症の私は、不安定さをこらえながら、やっとの思いで、岬に立った。

頭につめ込んできた予備知識と想像は、現実の日本海と、それに痛めつけられつつある地域の姿とは、そう違ってはいなかった。

暗さのイメージどおり、暗さが存在していた。

厳しさのイメージどおり、厳しさが存在していた。

しかし、私は、なお、求めようとしていた。予備知識や想像になかった、現実の中にあるなにかを。

その答が、日本海という放送劇であった。

答になっているかどうかは、わからない、けれど、それが答であってくれるように祈っている。

日本海よ、

私は、その夜明けを信じている。

（昭24・文卒・司書）

クラップ先生の思い出

上野　イト

遠く太平洋のかなたアメリカンボードから派遣されて、同志社のために献身され、また英語を教えておられた先生方を、折にふれてなつかしくお偲びする。明朗で温情ゆたかな方ばかりであった。いまクラップ先生の思い出の一こまを記そうと思う。

戦後の学制改革で、はじめて高校三年ができた時、私の担任クラス四十五名のうち十名は地方の公立高女の出身であった。その人たちは各自母校の長所をたたえて同志社の悪口を言った。私は「短所をみる目は悲しい、美点を発見する幸福者になりなさい」と軽く聞き流していた。ところが二学期の終わりごろ「先生、今になって同志社の滋味がよくわかりました。短かい月日ではこの学校の深さはわかりかねます」と以前の失言をとり消して私を安心させた。驚いたことに大学の卒業証書を持って「おかげさまで――」と挨拶に来たのはその人たちであった。生えぬきの同志社生は概して、大学卒業は当然のコースと思うので感激も喜びも浅いのであろう。

さてペンをもとにかえす。

クラップ先生はその高三に音楽を教えておられた。五月下旬のある日私は先生より呼び出された。生徒が何かご無礼をしたのだろうとビクビクしながらおそばに行った。

「Aさんはどんな境遇ですか」とのおたずね、

「父は幼い時に亡くなり、母は小学校の先生、弟は中学生です。何か悪いことでも……」

「Aさんの服装が大へんみすぼらしいので可哀そうです。布をあげますからさっぱりしたのを着せなさい。しかしこれは誰にも言ってはいけません」とのことであった。

――生徒一人々々をよく見ておられる温かいお心と、誠実に教壇を守られることに私は大そう感動し、また大音楽会のとき講堂で指揮棒をふられる態度にすきがないのは、日々の真実なご生活の累積によるのだすべてローマは一日にならずと思った――

その後、母上のも弟さんのもまた縫糸ミシン針までそえて大きなボール箱にぎっしり一杯下さった。誰にも言うなとおっしゃったけれど、私は先生方にお見せした。さっそく小門先生が仕立てて下さったので、クラップ先生から一ばんよく見える席につかせた。母上より校長さんあての丁重なお礼の手紙はお渡しした。

Aさんは「田舎の女学校では、誰もみな私と同じような服装です。遠くから汽車通学ですから朝はギリギリに学校に着き、放課後は大急ぎで帰りますので、他の人の服装をみるひまもありませんでした。美しいのを頂きましたのでびっくりして、あたりをよく見ましたらなるほど同志社の皆様の方は大そうおきれいでした。しかし何年か後に頂いた布がなくなりましたら、またもとのそまつな田舎風にもどります。このたびのクラップ先生のご親切は一生忘れません」と清く澄んだ目を伏せつつしんみりと言った。まじめに勉学したAさんは在学中

（クラップ先生）

一日も欠席しなかったのに、卒業後悲しくも結核で亡くなった。四十五名のあのクラスを偲ぶ時、特に胸深くうかぶのはAさんの面影である。元気に生きて幸福な妻となり母となってほしかった。

クラップ先生は昭和三十二年に、叙勲を栄を得られ、四十年十二月にはかしこくも皇后陛下にご面接、親しく語られた。

志望を全うされ功なりてめでたくアメリカに帰られ、いま設備の完全な老人ホームで、信仰深き友情と共に幸福におくられているよし、まことにうれしいことである。

心切にご長寿とご平安とをお祈り申し上げつつペンをおく。

終

ボーナスの思い出

大正の末か昭和のはじめの頃、松田道校長先生と、何くれとのどかに話していた時、ふと「公立ではボーナスというものがありますが、うちでもお出しになってはいかがですか」と申し上げた。松田先生はしばらく考えておられたが「そうですね。よろしい出しましょう」とほほえまれた。

その十二月に頂いたのは、校長さんより小使さんに至るまで、一律平等に五円であった（私の月給が九十五円の時）。これが全同志社におけるボーナスのはじめであったように思う。

まことに今昔の感深いものがある。

（元女子中高教諭）

付　記

本稿は、眼のご不自由な先生にお願いして特に書いていただいたものである。先生がなにか書かれる場合は、お孫さんが口述を筆記されるのであるが、本稿をいただいた時のお話では、お孫さんの都合で今回はそれができず、直接先生がペンを持たれ、それも天気のよい時の午前十時から午後三時までの間、虫メガネを使ってお書きになったそうでまことに恐縮のいたりである。

先生は、本年四月二十一日の女子部創立記念日に、九年ぶりに栄光館の講壇に立たれ、説教をしていただいた。その時のお話の一部でも、と思って原稿をお願いしたいわけであるが、先生にご迷惑をおかけしたことをお詫びし、併せて、貴重な原稿をいただいたことに感謝する次第である。

山城国府跡について

※木下良

一

国府はいうまでもなく、古代日本で律令制にもとずいて地方統治のために諸国に設置された地方官庁のことである。しかし、国府といえば中華民国国民政府を考える人が多いであろう。奈良時代の宗教政策として諸国に設置された国分寺はよく知られているのに対し、その上級官庁ともいえる国府については一般にはあまり知られていない。研究者の間においても、文献に残ることの少ない国府は歴史学の研究対象にはなり難く、また国分寺の堂塔のように明瞭な遺跡をとどめることもないので考古学者の関心もひかなかったのである。しかし、国府は単に官庁跡があるだけではなく、当時の地方中心として、政治・経済・軍事・交通・宗教・文化などの諸機能を備えて、都城を小規模にした都市計画にもとずいて建設されたものと考えられ、古代の地方制度を研究する上にはもっとも重要な研究対象である。

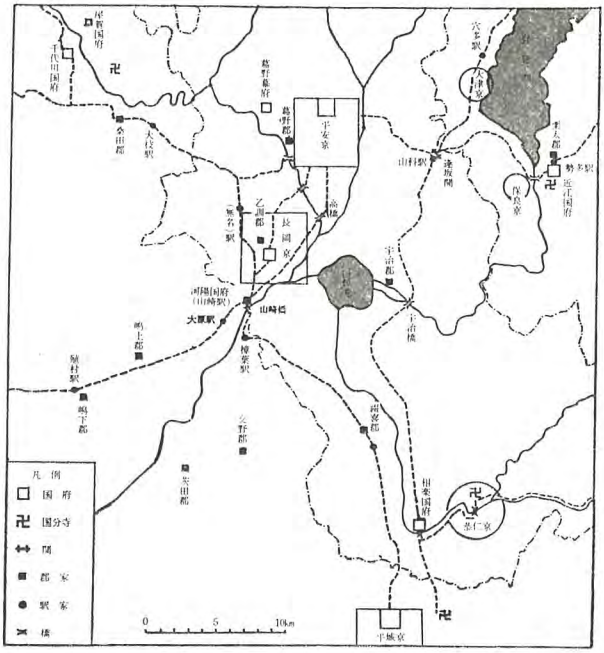
国府の研究・調査は主として歴史地理学の立場から行なわれてきた。地名・地割など地表に投影される古代の残象は景観として地理学の対象になりやすいからである。もちろん数少ない文献やわずかな遺物など、歴史学・考古学の成果は有効に利用されねばならないことはいうまでもない。私は数年来、歴史地理の立場から全国各地の国府跡について調査してきたが、ここでは山城の国府跡について述べてみたい。同志社大学人文科学研究所発行『社会科学』（三巻二・三合併号）に「山城国府の所在とその移転」と題して発表したものを、当編集部の要望によって書きあらためたものであるから、詳細を知りたい方は『社会科学』を御覧いただきたい。

二

さて、山城国府はどこにおかれていたか、吉川弘文館発行の『歴史手帖』や、藤岡謙二郎氏編『日本歴史地理ハンドブック』には、(1)相楽郡山城町？、(2)京都市右京区、(3)乙訓郡長岡町？、(4)乙訓郡大山崎村と記されている。これは従来の研究をまとめた結果のもので、数字は時代による変遷を示し、？は確実ではないことを意味している。若干の説明を加えると、(1)は奈良時代に平城京から山城国府まで半日行程であったこと、国分寺が相楽郡内にあることなどから、当時の国府も相楽郡にあったろうとする考えがあり、特に角田文衛氏は山城町上狛新在家付近に想定したものであるが、対岸の木津町に考える説もある

ので？が付されたのであろう。(2)は『日本紀略』に延暦一六（七九七）年、「遷二山城国治於長岡京南一、以二葛野郡地勢狭隘一也。」と記されており、それ以前には国府が葛野郡（現在、京都市右京区）にあったことが明らかである。その所在地としては、吉田東伍氏や角田氏は太秦としており、山田弘通氏は大覚寺東方の地を想定している。(3)は前記史料によって葛野郡から長岡京南に遷ったことが明確で、角田氏は長岡町の神足または今里であろうとし、山田氏はまた神足をあげている。いずれも確定的な証はなく、長岡京南は長岡町域に限定はされないので、？が付されているのであろう。(4)は『三代実録』に貞観三（八六一）年、「山城国奏言、河陽離宮、久不二行幸一、稍致二破壊一、請為二国司行政処一、但不レ廃二旧宮一、行幸之日、将レ加二掃除一、許レ之。」とあり、河陽すなわち大山崎にあった離宮が国庁に転用されたことが明かである。離宮は現在の離宮八幡社の地にあったとするのが一般の説である。

山城国府の所在地



三

前節に挙げられた山城国府の四想定地はいずれも妥当と考えられるが、おおよその所在地想定のみで、その規模・四至・平面形などは明らかでない。諸国国府の研究・調査の結果、ほぼ次のような事柄が判明している。

(イ)国内では中央より都に近い側に偏して位置することが多い。

(ロ)河川に臨み、駅路に沿うなど、水陸交通の便をはかっている。

(ハ)条里制を施行した平野部に位置する。国府は方六～八町程度の府域を占め、域内は一町間隔の方格地割を示すが、必らずしも条里地割とは合致しない。

(ニ)関係社寺を配している。

(ホ)同時代の遺物を出土する。

(ヘ)平安時代中期以降移転した際には以上のような計画性は認め難い。

以上の事柄を参考にしながら、山城国府跡について、その位置・形態・規模を考定してみた。ここで便宜上、四比定地を(1)相楽国府

(2)葛野国府、(3)長岡国府、(4)河陽国府と呼ぶことにする。

(1)相楽国府。角田氏の想定地は前記(イ)(ロ)の条件に合致するが、私はさらに、(ハ)の点を考慮した。すなわち、付近一帯には方格地割が認められるが、ほぼ南北を示しており、相楽郡一帯のやや東に傾いた条里地割とは明らかに異なっている。これは耕地計画のために実施された条里と、都市計画として施行された国府の条坊とは、目的が異なるために方位を異にすることがあるとの諸国の例に合致する。そこで両地割の接線を北限とし、奈良街道を中軸とする方八町域が、府域としてかなわしい。角田氏の想定地である新在家も域内に入るが、低地にあって洪水の危険のある同地より、北部の大里が段丘上にあって、国庁所在地としては適当である。

関係寺院としての国分寺は、加茂町例幣にあり、恭仁京の大極殿を転用したものであるが、国府との関係位置は適当である。諸国府跡には府域の内外に奈良前期の寺院跡が多く認められ、国分寺設置以前の地方官寺であったと考えられるが、相楽国府想定地の東方には、国府跡と同じ地割にのって高麗廃寺がある。飛鳥時代の創建で、帰化人の地方豪族狛氏の氏寺と考えられるが、奈良前期に規模・堂塔を拡充しているのは、国府の設置にともなって、地方官寺に転用されたと考えることはできないであろうか。府域一帯からは多くの土師器・須恵器の破片を採集しうる。

(2)葛野国府。相楽より葛野への移転は、平城より長岡への遷都に関係したものと考えられる。諸国府は中央政府との連絡上、国内でも都に近い方に位置するのが原則であるが、長岡に都が置かれてからは、相楽は山城の南端にあって不便となったからである。とすれば、その存続期間は十数年にすぎないので、遺跡としては明確になり難いことが想像される。吉田氏、角田氏共に、太秦とするが、私はその西の嵯峨野にあって、有栖川を西辺とし、仲野親王高畠墓のすぐ西を南北に通る道を東辺に、北は下立売通、南は三条通に限られる方六町域を考えた。明瞭な区画を作り、四隅に神社を配祀したと考えられ、国府の遺構がもっとも明確になった近江国府に似た状況を示すからである。この地域の南寄中央にあって、東西一町半・南北三町を区分する嵯峨野神ノ木町域が、国庁跡として適当と思われるが、遺物は乏しい。想定地の南側には桂川の分流旧河道跡があり、臨河川性も適合する。

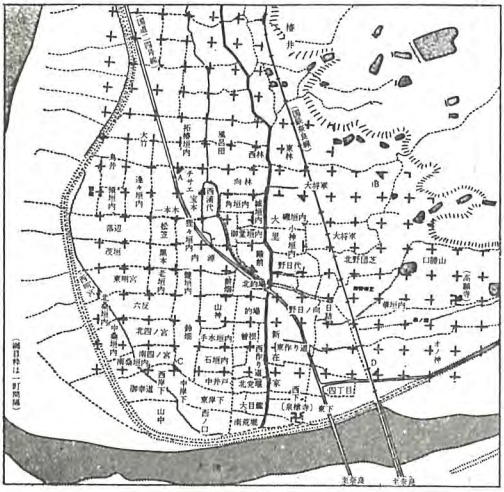
山田氏の想定地である大覚寺東方の地は、地割の点ではきわめて興味深いが、地形的にやや閉鎖的で、水運にも不便である。

(3)長岡国府。葛野より長岡京南への移転は、平安遷都後三年目のことで、遷都に関連して行なわれたことは疑いない。長岡京南とは、長岡京域外の南、また長岡宮(大内裏)の南とも解することができるが、前者とすれば、方六〜八町の府域を置くに適当な余地がなく、これは後者の意と解したい。私は角田氏や山田氏と同様に神足の地が適当と考えた。平安時代の駅路と考えられる西国街道が、南北の直線に走っている部分を軸に、方八町域をとれば、全域が台地上に乗り、東辺は小畑川の崖線に合致し、南辺は段丘の末端に当り、街道が直角に西折している。域内には長岡京条坊とは異なる一町間隔の方格地割が認められるが、かつての竹藪の中にもあったので、条里地割とは考えられない。国府固有の条坊であろう。域内には古瓦・土師器・須恵器などを出土するが、もちろん長岡京域にも入るの

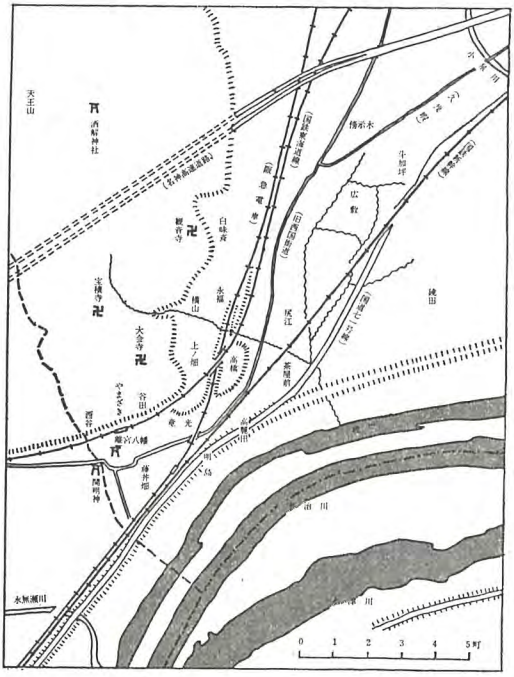
で、国府に関した遺物とは断定できない。

(4)河陽国府。古くから交通の要地であった山崎は、九世紀初めにはかなりの市街をつくっていたことが諸文献に知られる。弘仁四(八一三)年に嵯峨天皇は山崎駅を行宮にし、山崎離宮といったが、弘仁一〇(八一九)年以降は河陽離宮と呼ばれた。河岸では北を陽とするので、淀川北岸のこの地を河陽と呼んだのである。以来、承和一二(八四五)年に至る間、河陽離宮は史書にも見え、『凌雲集』『文華秀麗集』などにも河陽を詠んだ詩が多い。貞観三(八六一)年に至って、「久不二行幸一、稍致二破壊一。」という状態になって、これが国庁に転用されるようになるのであるが延喜八(九〇八)年までは一応離宮としての

想楽国府想定地



河陽国府想定地



機能も保持された。なお、仁和(八八五〜八)年中に菅原道真が詠んだ「致二河陽駅一、有レ感而泣。」の河陽駅や、『延喜式』にある山崎駅は、もちろん国庁と駅とが兼用されたものであろう。

その位置については、諸説いずれも離宮八幡宮の地としているが、同地は国鉄東海道線の敷設の際、その宮域がせばめられたのではあるが、それにしてもやや狭小の感がある。また社前を山陽道駅路が通過しており、近くにあった相応寺も「元是漁商比屋之地」、「累代商賈之廛逐二魚塩利一之処」にあり、離宮の所在地としてはあまりにも俗塵に近い。

また、延喜八(九〇八)年の殿舎に、「五間瓦葺殿一宇」などがあるが、離宮としての最盛時には、豪壮な瓦葺の殿舎があったものと考えられる。山陽道の備後・安芸・周防・長門などの駅館は、蕃客に備えて瓦葺粉壁にすることがあげられ、山城については特に述べられていないが、駅館に離宮を兼ねる山崎の場合は、当然それ以上の殿舎が考えられる。

現在、山崎でもっとも多量に古瓦の出土を見る地域は、阪急電車と国鉄東海道線の交叉する地点の東西両側一帯の台地で、小字「高橋」「上ノ田」にかけての地である。この地は天平三(七三一)年に行基の建立になる山崎院の故地とされるが、天平以前の古瓦が出土し、行基の山崎院は河内国ともあるので疑問が多い。一方、『日本書紀』によれば、白雉四(六五三)年に「天皇(孝徳)恨欲レ捨二於国位一、令レ造二宮於山崎一。」とあって、この地方におけるもっとも形勝のこの地は、宮地としてまず選地された筈であり、その跡が駅館・離宮に利用されたと考えられないだろうか。『文華秀麗集』所収の詩には、離宮を「山館」と呼び、また江上の風景をうたったものも多い。一般に駅跡の調査例はきわめて少ないが、広島県府中町下岡田遺跡は、この地と同様の台地上にあって調査者は駅館跡と想定している。

山崎橋は離宮前に架けられていたことが、詩文に記されているが、字名の高橋は山崎橋を意味するものであろう。離宮八幡の社名は諸国々府の近くに祀られる国府八幡に相当する鎮守社を離宮八幡と称したものと考えられる。なお、山崎の地は狭隘で、前地のように方六〜八町の府域を置くに足りないが、国府の機能の縮少し始めた九世紀中頃では、律令制盛行期のような都市計画は行なわれず、庁舎のみを使用したものと考えられ、承和一一(八四四)年に、摂津では鴻臚館を国庁に転用しており、既設施設の利用の一連の動向もうかがわれる。

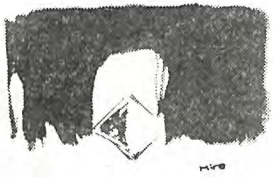
四

以上、不十分ながら山城国府跡について考察を試みたが、畿内では大和・摂津など、都城所在国またこれに次ぐ要国であるにもかかわらず、その国府跡は全く不分明である。中央に近いだけに律令制の衰退にともなって、いちはやくその機能や形態も変化しやすいからであろうか。山城を足がかりとして調査の歩を進めたいと考えている。諸者諸氏の御助力がいただければ幸いこのうえもない。

(女子中高教諭)

中国語と文型

大原信一



昔、『コトバ』という雑誌が「日本語の基本文型」についてシンポジウムを行なったことがある（昭和十六年二月号）。それから数ヵ月間、この問題をめぐっていろいろな考えが発表された。その中に大出正篤氏の「日本語の初歩教授からみた文型の考察」という文章がある（同、六月号）。

大出さんは中国大陸でながらく日本語教育に従事されていたベテランで、大正十年頃から「文型」という用語を使って、在来の対訳式教授法を改革しようと努力されていた。

「読本に書かれた各々の語句に価値があるのではない。また読本に現われた表現をそのまま覚えたからとて話言葉の上達は望まれない。そういう表現の形すなわち文型を活用し応用発表せしめることによって話す力は生ずるのだ」と説き、自分の主張を次のように要約している。

一、日本語教授者の研究は「話す力の養成」を目標とすべきである。

二、言語発表は練習による習慣の形成によってのみ達せられる。

三、外国語教授法の眼目はその練習方法の研究にある。

四、その練習の対象を「文型」におくことによって効果が期せられる。

大出氏の主張は今日なお新鮮さを失っていない。従来の国文法は日本人が文章を解剖するのに役立っても、外国人の日本語教育にはあまり建設的な効果をもちえない。それを打開しようとした体験に基づくからであろう。

一方、同じ大正の末期に、西尾実氏らによって、文型・基本文型という術語こそ用いられなかったが、言語教育の出発点において読み方に力を入れるより綴り方から出発する方が自然であり、そのために話し方に基づかなければならないとして、この問題の研究が始まっている（垣内松三「基本文型の問題」、同上、二月号）。

昔から日本の武道や芸事・作法の世界では型（カタ）をやかましく教えてきた。型はそれぞれの場面にふさわしい形（カタチ）をとることによって生命（イノチ）を与えられる。日本人の生活の伝承には、型を通じての伝達にかなり大きくよりかかってきた面がある。紹介した二つの例は言語の習得における型の自覚といえるのではなかろうか。

日本語の基本文型の体系が初めて記述されたのは『日本語練習用　日本語基本文型』（昭和一七年）であろう。『日本語表現文典』

（国際文化協会、昭和一九年）も文型に準じて考えられる。これらはいずれも日本帝国主義が中国大陸から東南アジアへ伸びた時代を背景としており、文型集として刊行されたものは日本語を外国人に合理的能率的に教えようとする必要から生まれたものである。

＊

私がはじめて中国語の教壇にたったのは昭和十八年で、その頃すでに、もっぱら語順を手がかりとして、中国語の基礎文型への試みがなされていた（魚返善雄　雙訳華日語法読本）。それとは少し違う視点から私もこの問題を考えた。『中国語表現文型』（昭和二十四年）がそれで、心的範疇（たとえば命令・疑問・比較など）はどのように表現されるかある意味を表わすためにどんな表現形式がとられるか、その類型をまとめたものである。イエスペルセンの考えや林語堂の『開明英文法』の影響をうけた点が多い。中国でも、よく似た考えがより精密に試みられているのを後になって知った（呂叔湘　中国文法要略）。

外的形式と内的観念の表出が合理的に結びついた真の意味の表現文型が中国語にとって有用であるという考えは今も変らない。しかし、私の以前の作業は、言語練習用あるいは教室内での言語活動に必要な表現（年令・姓名・住所・本籍・時間・年月日・数・値段……など）を主軸にして、その発表形式の類型を求め、その中の基本的で練習すべきものを選んで配列したものであった。正しくは「慣用文型」とよぶべきであろう。それはそれなりに必要ではあるが、文型の一つの利用面で、やはり第二義的なもののように思われる。まず第一義的な文型の体系が求められるべきで、その中から基本的なものが組織だてられるべきであろう。

＊

文型の問題を論じながら、本家本元の英語にふれないわけにはいかない。英語では文は用途の上から平叙文・疑問文・命令文・感嘆文の四種に分けられる。用途とは表現意図のことと考えてよい。四種の表現意図の違いは文の構造すなわち文の構成要素の配置のしかたに現われる。つまり表現意図の在り方によって語の配置がきまり、動詞の形がきまる。文型はほぼ文法の体系によって支えられ、英文法を知ることは英語の表現を行なうために必要条件になる。

英語では語の配置（語順）がきまっているので、この面から文型はきれいに作り上げられるが、日本語はどうか。外国人に日本語を教える場合、国文法は役に立たないといわれるのは、文法書の記述のしかたにもよるが、決定的なのは日本語の表現様式が語順（語の配置法）によって決定されないということである。「今日は行く」を疑問文にするとき、日本語では語の位置をかえる必要がない。また「お父さん見る？」「テレビ見る？」のように、主語・目的語があろうがなかろうが、またあってどういう位置をしめようが、表現の性質に変りはない。文の表現様式を構造的にとらえる場合、主語述語目的語といった文の成分にとらわれず、文法の範囲をふみこえることが必要になる。表現という言語行為を習得するにあたって、「意味に即した構造」が必要とされる所以である。

では中国語はどうか。

我　妹妹　唱　歌兒（My sister sings song）Wo meimei chang ger

私が歌っても妹が歌っても「唱」であり、また一つ歌っても三つ歌っても、「うた」は「歌兒」である。このように語形変化のない

中国語では統辞的関係はもっぱら一定の語順によって示されざるをえない。語順の定不定と語形変化の有無（とくに格の標識の有無）とは互に密接に関連しているようである。

なお、語の連結の順序が固定しているとともに、語の連結関係にも一定の制限があり、あるグループの語はあるグループの語とは一定の関係で結びつくが、他のグループの語とはそういう関係で結びつかない。こうした連結関係を基準として語を色々の種類（品詞）に分けることもできる。

絵画は三次元の世界を二次元のわくに収めるが、言語は音声の継起性に依存している。すなわち線条的であって、文や句を構成している語は互に前後関係をとって配列されざるをえない。中国語はこうした言語の条件を最も有効に利用しているということができる。

中国語では語の連結の型は英語の場合よりも鮮明に作りあげることができる。しかし表現という言語活動を習得するための「文型」を記述するに当って、文法的構造は有力な手がかりではあっても、唯一のものではない。

他是誰？（Who is he？）
Ta shi shui

「疑問文でも語順は変らない」点は日本語と同じであって、この例文は「主語＋述語」の類型に入ってしまう。それを区別するためには疑問という「意味に即した構造」による他はない。

先にのべた「文型の体系」を改めて考えなおしてみたいと思って、問題を白紙にもどして考えることにした。今までモヤモヤしていたものをハッキリさせるために、集めたカードを同類のものごとに付図のような形に図形化してみた。今のところ、単文の部分しか整理が進んでいないし、また図形そのものが未熟なので、まだ全面的に教室で使っているわけではないが、新しい文型へ入る場合、感性的理解を促す点で若干の効果はある。東京オリンピック以来急速に普及したサイン・ランゲージや国際交通サイン・道路標識程度の描写性がほしいし、ユーモラスな表現も歓迎されるべきであろう。学生諸君からデザインを募集しながら、時間をかけてもうすこし洗練された試案を作りあげたいと思っている。

（商学部教授）

付　図

使用した記号の一例

□ 名詞　◪ 数量　⊞ 場所
⊠ 時間　[?] 疑問
▽ 動詞　▽ 連続動詞　▽ 反復疑問
▽ 複合動詞
○ 目的語　◎ 兼語
△ 形容詞　△ 反復疑問
▭ ◎ 提示語，なかの○は目的語
▭▽○ 主述構造が目的語となる場合
▭△ ▭▽○ 〃 主語となる場合
▭△ 〃 述語となる場合
！命令　!!感嘆　¿反問

用　例

1. □═▽　我很忙
2. □═▽═□　我是学生
3. □═▽═○　姉妹唱歌
4. □═▽═○═○　先生教地理
5. □═▭△　他身体好
6. □ jiao ◎═▽　先生叫我通知你
7. □ (Shi) ▽ de　他(是)昨天来的
8. □ bei ▽　所有的困難被克服了
□ bei-O ▽　老樹被風刮倒了
9. □═▽ de △　我説得不好
□═▽═○ ▽ de △　我説中文説得不好
10. 全体 部分═▽═○　我們三個人，両個人没有銭
◎，□═▽　衣服，我洗完了
▭，□═△　屋子里空気好

良寛短歌の英訳

柳島彦作

日本の詩歌を英語に訳すということは出来ないことではないでしょうが、非常に難かしいことです。このことは四年程前大阪府の茨木の梅花女子大学の図書館の皆さんが啄木の歌集「悲しき玩具」の英訳を完成されたときに私もすこしお手つだいをさせていただいて以来身にしみていたことです。

申すまでもなく良寛さんの詩歌は、良寛さんの生活そのものからにじみ出たものです。良寛さんの生活そのもののきびしさが、良寛さんの詩歌の中にするどく感じられます。私はこのような内容をもつ良寛さんの詩歌の本当の姿を、外国語で表わすことがほとんど不可能に近いということを、よく知っております。それではなぜそういうことにふみきったのか、この点をすこしばかりのべてみましょう。

私はすなおに申しまして、良寛さんのように徹底した生活に生きぬいた人が、日本人の中から出ていることに大いなる悦びを感じ、誇りを感じます。もちろん良寛さんの生活の中にも欠点もありましょうし、今日の私どもにとって到底解りかねるところも多々あると思いますが、良寛さんの人間そのものに、正面からふれてみると、時流に支配されない常に変化してやまない浮世的現象をいさぎよく超越している「良寛の生命」に自分を投入することが出来ます。

良寛さんは実に自由自在に生きていた人であります。しかしそれは自分勝手なでたらめな自由――そんなものは本当はないと思いますが――と全く異なったものであり、外面的な制約などには左右されない静かなる自由とでもいえるものであると思います。私どもの心のおくそこにも、こういう意味での自由をもとめる心の故郷のようなものがあることに時には気がつくことがあります。こういう自由こそが澄みきった自由であり結局人を人たらしめる大自由とでもいうべき自由であると思います。良寛さんの生活はこういった自由のインカーネーションであったのです。こういう意味における良寛さんの自由の根底はどこにあったのでしょうか。

先日私達（同志社中学の児玉先生と私）の共著の Ryokan the Great Fool（一九六九年四月二十六日、京都精華短期大学出版部発行）の出版記念会の席上、私とは五十年来の友人の足立宇三郎さん（大正五年同志社大学経済学部卒）が、エマスンと良寛さんと私とは一脈の類似点があるといい、それはこの三者の Cosmic Life に対する気もちが共通しているというようなことであったように思います。

申すまでもなく私が三者の中の一人に当るなどとは思いもよらないことでありますが、私がエマスンに強く引かれていることは事実

でありますし、良寛さんとエマスンに似通う点があるとも思いますが、はっきり申しまして良寛さんの方が親しみやすく見えて、実は私どもの到底近づくことの出来ない存在であると私には思えてなりません。

良寛さんのあの自由さの根底をどこに求めることが出来るか。私は良寛さんは総てのものに対して誠に深い思いやりを持っておられ、しかもその思いを日常の生活の中に現わすためにあらゆる努力をされたと信じます。このことの中にこそ彼の人として何ものにも犯されない強さがあったと信じます。良寛さんは又非常に人なつっこい人でもあった。そしてこの人なつっこさの中にはこの人の心の広さと大きさとを、はっきりと感じます。

前にも申しのべましたように良寛さんの詩歌にはそのくらべもののないような自由自在でありますが、それは実に彼のスキのないきびしい日常の生活から生れてきたものでありますから、こういうことに徹しなければこれを外国語に訳すなどということは出来ることではありません。私の訳はしかしながら英語に訳したのではなく英語という形を用いて日本語で書いたという方が適当だと思います。この点をすこし具体的に説明することにしましょう。

多分一昨年あるいは一昨々年でしたか、朝日新聞の教育シンポジウムにおいて「日本英語について」という題のもとに私の所見を発表したことがありました。その発表の中に私は「日本人の英語には日本人のみのもつニュアンスがあるし、又なければならない」と主張し、Tenshin Okakura, Kanzo Uchimura, Daisetsu Suzuki 等の作品より文例を引用し、さらに私の最初の英詩集 "A Crow Caws" 中の一篇――この一篇はプラーグ大学のローゼック教授が「ここにこそ日本人の心の表現がある」と評した――を引用した。私は更にことばを加えて「日本人の英語には日本人の心の表現にふさわしい表現があるのが当然である」と結んだ。するとこれに対する反響が約六十の通信と十数の電話となって現われました。私は英語は今日においては明らかに世界語的な性格をもってきており、これはマリオ・ペイ教授のいうようにリングイスチック・イムペリアリズムの結果というようにも考えられますが、目下のところ英語の世界語としての役割を否定することは出来ません。英語が広い地域にわたって使用されていることの自然の結果として、英語には数多くのバラエティがあります。このことについて面白い例を一つ書いておきます。

一昨々年の夏私の恩師ロムバード先生のお孫さんがとつぜんおいでになったとき、いろいろ話している中に、この人の英語が私どもが教わった英語とどこか違うということに気がつきました。そこでそのことをたずねてみると、その答が実に面白い。この人は「私は米国で大学をおえ、さらに英国へ渡りそれから南アフリカで仕事をし、それから平和部隊の一員としてアフガニスタンで二年間すごしこれから国へ帰る途中です。私の話す英語はあちらこちらを遍歴している中にいろいろな影響を受けたものです」といいました。このことはいい方を変えますと各地における人たちの考え方の相違が、違った表現を生みだしたというようにも考えられそうです。日本人の英語も、「日本流の」品位もあり、かつ日本人の心を表わすに足るだけの英語であるべき時代がきていると思います。

良寛さんが国上山の五合庵に独居された時に折にふれてお作りになった詩歌は申すまで

もなく良寛さん独自のものであり、そこには誠に簡素ではあるが、しかし深い精神生活のはかりしれない位の内容をもったものがあるのであります。その味を外国語で表わすことは至難のことではありますが、こちらの心がまえによってはできないことではないと思います。

しかしそれをなしとげるためには——例えば良寛さんの短歌や俳句を英語で表わすということならばできるだけ良寛さんの心境に近い心境や気もちにならなければなりません。

「来てみれば山ばかりなり五合庵」という良寛さんの句がありますが、私にとりましてこの句の心を英語で表わすことはなかなかに苦しかったのです。それはかならずしも難かしかったためばかりではなくこの一句には良寛さんのそのときの気もちが痛いほど生きているからであります。そこで私はこの名句を良寛さんにあやまりながら、それでも一生けんめいになって次のように書いてしまったのです。

I came up to Gogō-An at last/ Only to find mountain after mountain/Endlessly waving on.

私は何ということもなしにこんなふうに書いてしまったのです。もちろん英訳としてはいろいろの表わし方がありますが、私は五合庵のある国上山を中心として多くの山なみが波のようにうねっているところが目の当りに見えてくるのです。そこで mountain after mountain endlessly waving on という表現がごく自然にでてきたのです。

もう一つ例をあげてみましょう。良寛さんが、自分の心もちを最も端的に表わしたものとして、誰でもが最もよく知っている「裏を見せ表を見せて散るもみじ」を考えてみましょう。これは誠にすっきりした良寛さんの生活そのものを表わしています。したがって英語でこの心をしっかり捕えていくということは余程気をつけなければならないのであります。しかしやって出来ないことはないと思います。この句を英語で表わす仕方は種々の仕方があると思います。私はまずこれを次のように表わしてみました。

Ah. Maple Leaves/Scattering away/ One and all/Each showing/its face and back.

Ah というような語をつけたのはかえって蛇足かもしれませんが何とはなしにでて来ました。ロンバード先生のお孫さんの英語がすこしちがって聞えましたのは前にも述べましたように、彼が各種の英語を話す人と交わってきたことと、それからいろいろな考え方や感じかたが、そういう考え方や感じ方を表わすのに適した表現形式を生んだのではないかと申しましたが、私はどうしても良寛さんのような生活をした人の詩歌を英語に書きかえるときにはあの澄みきった、それでいて複雑ななやみを経験した良寛さんにふさわしい表現を見出すように努めなければならないと思います。私が私の父の墓参をしたときの詩に、父の墓所に行くまでの道の両側にある藪かげの静寂を wet silence という文字を用いて表わしたことがありました。そのときにある米人が「この表現はまことに面白い、私なんかにはちょっと思いもつかないものですよ」といったのをときどき思い出します。

最後に私の強くひかれている良寛さんの短歌を考えてみましょう。「あしびきの岩間をつとふこけ水にかすかにわれはすみわたるかも」私はこの句をよむごとに深い静けさに浸ると同時に寸分もすきのない良寛さんの内的

生活に強い迫力を感じます。この短歌の心を英語で表わすことは私にとっては至難のものでありました。その理由は申すまでもなく私自身にこのような生活体験がないからであります。けれども私は私なりにこの歌の心が解っているように思えているのです。そこで私が理解し得た点を次のように書き表わしてみました。

I hear/A moss-covered stream/Trickling among the rocks;/I feel calm and clean imperceptibly/As I am listening to it.

この歌は実に美しくかつきびしいかぎりであります。私の書いたものは拙劣ではありますが、私としましてはこれで全力をあげたつもりです。私はここに表わしたものの方が私たちの書物にのせたものよりよいと思います。それはどんなことを書いてもそうでありますが、自分で書いたものを、あとになっても一度よみ返しますと全く「いや」になるほど欠点が目立つからであります。

ここで「大愚良寛」につきまして一言だけ述べさせていただきます。

あの書物の材料はすべて同志社中学の児玉先生からいただいたものです。なお英訳についてもいろいろお世話になりました。児玉先生は良寛さんの良さを十分理解されその理解を惜しみなくあたえて下さいました上、二度までも国上山を訪れ、忠実に共著者としての責任を果して下さいました。又京都精華短大の宇田先生（同志社出身）からはあの書物のアレンジメントについて、更に足立宇三郎氏からは漢詩の校正についてなみなみならぬご協力をいただきました。

その他精華短大出版部、梅花女子大の諸先生の温い友情がなかったならば、あの書物も日の目を見ることは出来なかったことでしょう。

（精華短期大学教授・大五大経卒）

校友会からのお願い

校友会名簿は、一九六五年に刊行されたが、その後の新会員の追加、および会員の異動を修正する必要にせまられ、新版の刊行をのぞむ声がつよかった。そこでこのたび、校友会名簿委員会（委員長・川北貞一氏）を設置し、一九七〇年五月刊行を目標に、現在編集作業に全力をあげている。

何分十万人をこえる大世帯の会員名簿だけに、作業は難行しており、とくに会員の異動については、確実に調べる方法がなく会員各位のご協力を切にお願いする次第である。異動のあった会員は、校友会本部あてご連絡願います。

なお、会員の多い会社の社員名簿、あるいはゼミナールの名簿等、参考になるものがありましたら、ご送付いただければ幸甚です。

校友会名簿に広告募集

名簿は三年に一回程度の発行です。詳細は校友会本部（TEL二三一―二六三六番）へお問合せください。

新島襄とマックス・ウェーバー

雨谷昭弘

序

数年来私は新島襄に今一つのもの足りなさを感じ続けている。偉大であると思うが、何か欠けている。強烈に印象づけられるものを感じないのである。同様の感覚をマックス・ウェーバーにも抱いていた。そして両者の間に何かある共通性を感じていた。それは私自身に対する共通性でもあった。しかしそのことについて考えてみようとはしなかった。

ごく最近ウェーバーの著書に再度接する機会を持って、この点が明確に認識され、そして一応の結論じみたものを得るに至った。

マックス・ウェーバーについて

ウェーバーに対する私の第一印象は「何かもの足りない」ということである。もちろんその著作を全て読破したわけではないから断定はできない。ウェーバーが社会学その他の分野において多くの成果をあげていることは認めねばならぬ。がそれらはいずれにしても何かをまとめ上げ、あるいはよき批評を行なっているということであって、ではウェーバー自身はどのように考え、どのように行動しようとするのかと問うと反応がないように感じられる。例えば経済学の分野において、マルクス経済学をよく批判しまた近代経済学の一派とも袂を分かつのであるが、ではウェーバー自身の語る経済学はというとプロテスタンティズムとか精神とか、一つの分析方法であるかもしれぬが、尽きるところこれといった経済学の体系があるようには思えない。

ウェーバーに関して私達の見るべきところは、完成された思想とか具体的な主義にはない。彼の問題としたところは、個人が人間としてあるいは生きる姿勢としてどうあるべきかということにあるように思う。ウェーバーは祖国愛に満ちた憂国の志士である。彼にとっては彼の祖国ドイツが西欧式の資本主義国になろうが、また東欧の共産主義国になろうが、そのこと自体は最重要の問題ではないのである。問題は祖国が今崩壊の危機に瀕し、人間性が無視されナチズムが狂いつつあることが問題なのである。

ウェーバーが求めるところは、ドイツの将来の理想像を掲げてその思想を普及せしめることではなく、ドイツの将来を築き発展させて行く若者を育てること――生きる姿勢の教育――にあると考える。

人間としての生きる姿勢と思想の相違

私の考えによれば人間としての生きる姿勢あるいは態度というべきものと思想とは相異なる性質のものである。しかしながら一般的にはこのことがほとんど混同して使われているように思える。

人間としての生きる姿勢あるいは態度というものは思想と呼ぶ以前の段階での問題を取り扱っているものである。思想以前のより根源的なもの、たとえば情熱を持って生きるとか、真摯に生きるとか、積極性とか、また善意・信頼・責任というようなものが問題となるような次元のことであると考える。そこには人間のバイタリティー(生命力)、エネルギーというような問題の立場であり、あるいは個性と称せられるようなものであると思う。

例えれば「生きる姿勢」とか「態度」というものは人間の精神の下部構造であり、これに対して「思想」とか「主義」とかいうものは精神の上部構造である。「生きる姿勢」というものは思想を生み出す母胎となるものであって「思想」とは区別されねばならない。

ここでウェーバーの考えを引用させてもらうと「理想型」という概念に対して次のような説明を行なっている。

「社会科学の諸理論は皆人間行動に関して一定の条件と動機とを設定して、そこから理論的にいかなる結果が生まれてくるかということを論じている。従ってそこから導き出された理論は現実そのままではないわけである。それはある目的のために一定の条件を設定し、その下で合理的に論理を追求していった結果のいわゆる理念像なのである。これが理想型である。

それ故理想型の設定による分析方法は常に自ら限界を反省しなければならない。そして絶えず別の観点から行なわれる別の理想型分析によって今までの理論を発展させて行くことである。古い理論は新しい理論によって絶えず克服されて行かねばならぬ。」

右の文章においてその後半を取り上げたい。すなわちここで理論と称しているものは思想に置き換えてもよい。そして古い理論を克服し新しい理論を作り出す原動力となるものが、人間としての生きる姿勢である。

従って両者の間には常に相互作用が行なわれ、生きる姿勢の中から新しい血流を従来の思想の中に送り込み、さらに発展させて行かねばならない。このようなことを工学用語で Negative Feedback (負帰還) と称する。

思想・主義
⇧ ⇩
人間としての
生きる姿勢・態度

旧来の思想にとらわれて、それを金科玉条とすることなく、常に前進的な姿勢で生きて行かねばならない。思想を失くせば無思想といわれるが、逆に人間としてのあるべき姿勢を失なえば、偏狭に惰し発展性に欠ける。

教育について

再度ウェーバーの言葉を引用すると、「職業としての学問」の中で次のようなことを述べている。

「大学にとって大切なことはいろいろの物の見方があることを学生に教えることである。価値というものは唯一ではない。いくつかの価値があってそれぞれの価値秩序の内部ではどのような理論になっているかを考えなければならない。どの価値基準に立つかは学生の自由である。」

このことは私の大学に対する考え方、さら

に広くいえば教育に対するあり方と一致するそして私なりの解釈を行なえば、教育とはまさに人間としての「生きる姿勢」あるいは「態度」を養成することにある。すなわち教育とは前節で述べた「生きる姿勢」と「思想」ということにおいて、「生きる姿勢」を作り上げようとするものである。ただ、知識を与える場ではない。ましてやある主観的な主義主張、あるいは個人的な世界観や思想を強いるものではない。特に高校までの課程における教育ではこのことが強く取り上げられるべきであると考える。この点において現在の日本の教育制度には非常な疑問を感じる。

教育とはまず「人間としての生きる姿勢」を養成することであり、さらにいろいろの物の見方があることを教えることである。この意味において、やがて人がそれぞれの立場において思想を確立するに至る基礎となるべきものを育てる場である。従って教育とは困難なものである。知識を分け与えたり、思想を押しつけることと違って、人の生活態度の変革を目的とするのであるから極めて困難なことである。

新島襄とマックス・ウェーバー

最初の標題に戻ろう。ウェーバーが欲してなさんとしたことは、ドイツの将来の理想像を掲げてその思想を普及せしめることではなく、ドイツの将来を築く「人」を作ることであったと私は考える。人を作るとは生命力を吹き込み、情熱を抱かせることである。

そしてまたわが新島先生は「人を植うるは百年の大計なり」と言って同志社を設立された。新島先生は「人を植うる」すなわち「人を作る」ことを目指しておられたのである。

ここにおいて新島襄とドイツの愛国者マックス・ウェーバーとの間に共通性を見い出すのである。新島襄もまた日本の将来を思う憂国の志士であった。

新島襄とウェーバーと共通して問題であったことは、ある思想を学生に持たすというようなことではなく、それ以前の段階において、人間としての生きる姿勢を確立さすことにあったと考える。このことを称して「人を作る」と言っているように思う。

新島襄もウェーバーも共に教育者である。しかしながら思想家と呼ぶにふさわしい人間とは感じない。この点において最初に述べたように私は共通してこの二人に何かもの足りなさを感じたのである。

しかし、いわゆる思想家でないが故に一層偉大であるのかもしれない。

以上のように考えてくることによって、ここ数年来新島襄に対して持ち続けていた疑問はひとまず解消したのである。しかしながら、その精神—いわゆる同志社精神といわれるものについて、現実の同志社を見回した時、まだまだ多くの疑問が残る。

新島襄とその精神

新島襄は偉大な教育者である。しかし思想家とは感じない。従ってその足跡は極めて把握しにくい。先にも述べたごとく教育ということが非常に困難なものであるだけに教育者である新島襄を理解することはむずかしく、またその目的とするところを認識することは容易でない。一般的な新島襄およびその精神に対する理解は、生きる姿勢と思想とが混同されている状況にあるために非常に不完全であると思われる。従ってその語るところを私達が自分のものとして感ずることは一層容易

ではない。

新島先生が生きておられればその生活の中から容易に学び得ることが、いったん他の何かを媒介とすると非常に得難くなるのである。

現在において教育の最良の方法は、もはや旧来のごとき立場における対話ではあり得ない。しかし立体的対話という言葉で表現されるような対話というもののもつ意義は大きい。そしてまたそのような対話――人格の接触――のもつ教育効果が非常に大であるということも否定できない。

この点において私達は教育の方法論について再検討し、より優れた方法を開発する必要がある。唯々従来の教育法を踏襲しているのでは教育はますます困難となる。現在新島精神あるいは同志社精神といわれるものが極めて希薄であるのは当然であろう。マスプロ教育の進展と共に教師と学生の接触はますます疎くなり、それと同時に同志社精神といわれるようなものも薄れていくであろう。やがてはそれらの精神といわれるものが単に形骸でしかあり得ないような時代が到来するであろう。

このような事態にいかに対処して行くか？少なくともあらゆる機会を利用して新島襄を紹介し同志社のあり方というものを知らす必要があるのではないか。そして根本的な対策として教育のあり方、その方法論を再検討する必要がある。これは単に同志社一大学の問題ではなく、日本のいや世界全体の問題でもある。

〔追記〕本稿は昨年書いたものであって、その後の大学情勢の変化、混乱を見るにつけ、ますますその意を強くしている次第であります。この他に続編的なものとして同志社および新島先生についての小冊子的なものもまとめておりますが頁数の都合で割愛させていただきます。文章の拙さから理解しにくい面も多々あるかとは存じますが、何らかの問題提起になれば幸いに存じます。

（昭43工院卒・工学部助手）

（65頁から）

新歴史学派として理解すべきであり、わが国経済学史上、明治時代における新歴史学派の先駆者として、特記さるべきもの」と位置づけていられる。ラーネッド博士が「右手にバイブル、左手に経済学」という思想的立場から、早くも貧困問題に対決する経済学思想の担い手として、自由経済学の域を乗り越えてゆく進歩的態度を示したのは、日本における同志社学派の源流の奈辺にあるかを物語る。そのことこそは、社会思想家としての住谷博士をして、ラーネッド博士に特別の親近感を抱かしめた所以でもあろう。

いま歴史的な大学問題の渦中にあって、同志社学園は革新への苦悩の道を歩みつつある。明治三十一年十二月、徴兵猶予の特典をめぐって、同志社綱領「本社ハ基督教ヲ以テ徳育ノ基本トス」「本文ノ綱領ハ不易ノ原理ニシテ決シテ動カスベカラズ」の削除問題を中心に、社長横井時雄と理事会総辞職の悲運を迎えたとき、論議の席上、沈黙寡言のラーネッド博士は、突如立ち上って、「神様は同志社を必ず守って下さいます。同志社は決して亡びません」と静かに一喝、以って衆議の向うところを定め、同志社の伝統を守り抜かれたという。本書の著者こそは、いま同志社総長として、紛争のなかで格別の感慨を抱いていられるに違いない。

（文学部教授　嶋田啓一郎）